

第3章 ジャナ・バハの本堂

1. 本堂の概観

ジャナ・バハの境内の中央には、多くのストゥーパに囲まれた本堂が高くそびえている（写真3）。それは二層の屋根を持ち、大理石の土台の上に、正面入口を東に向けて立っている。土台の正面には三段の階段があり、一階の回りには、回廊（右邊道; Pradaśiṅapatha）がある。南、西、北の回廊の回りには、さらに、上部にマニ車を付け、下部に燈明台を付けた鉄柵がある。本堂の土台の四隅（東南、南西、西北、北東）に四頭の、正面階段に二頭の獅子像がある。土台の東西の長さは、11.7mであり、南北の長さは11.1mである。本堂の東北と南北の長さは、それぞれ8mである。正面には三つの入口があり、その上方にはトーラナ（戸口の上にある半円形の装飾物）がある。さらに、その上には、一階の屋根を支え、世自在⁽¹⁾ *lokeśvara* の彫像を付けたほおずえがある。入口の両側の壁面は、女性像や忿怒像等によって飾られている。一階正面の構造は概念的に図4のように表される。

2. 本堂の正面入口

正面入口は、小像やトーラナによって飾られている（写真56, 57）⁽²⁾。正面三つの入口のうち中央の入口には、左側と右側にそれぞれ目蓮 *Maudgalyāyāna*、舎利佛 *Śāriputra* の小像がある⁽³⁾。そして、正面入口上には、次に示す（1）から（31）までの像があり、（1）から（6）までの像は入口の上部の縁に、（7）から（31）までの像は、入口の上方にあるトーラナに飾られている（写真57-60）。以下それらを説明していこう。（図3は正面入口上の構造を表したものであり、文中の番号は図3に示された番号と一致する。）

（1）は一面二臂の坐像である。左手で金剛(?)を持つ⁽⁴⁾。（2）は一面二臂の立像である⁽⁵⁾。（3）も一面二臂の立像である⁽⁶⁾。（4）は阿弥陀仏 *Amitābha* であり、定印で結跏趺坐で坐す。（5）は一面四臂像である。右の一臂は数珠を持ち、残りの一臂は施無畏印を示す。左の一臂は経函を持ち、残りの一臂は左足の上に置き、結跏趺坐で坐す。（6）は一面四臂像である。二臂は合掌し、右手は数珠を持ち、左手は払子を持つ。

（7）は十一面の千手観自在立像である。主要な八臂のうち二臂は宝珠(?)を持ち、合掌する。右の三臂はそれぞれ、法輪を持ち、与願印を示し、数珠を持つ。左の三臂はそれぞれ、蓮華、水瓶、弓を持つ⁽⁷⁾（以下（18）まで写真58⁽⁸⁾を参照）。（8）は一面二臂像である。右手で与願印を示し左手で蓮華を持ち、遊戯坐で坐す。（9）は一面二臂像である。右手で与願印を示し、左手で蓮華を持ち、結跏趺坐で坐す。（10）はマカラ *Makara* である。（11）は阿閼如来 *Akṣobhya*⁽⁹⁾で

あり触地印を示し結跏趺坐で坐す。(12)は大日如来 Vairocana であり、転法輪印を示し結跏趺坐で坐す。(13)は一面二臂の竜王 Nāgarāja である。(14)は阿弥陀如来であり、定印を結んで結跏趺坐で坐す。(15)はガルダ鳥 Garuḍa である。(16)は一面二臂の竜王である。(17)は宝生如来 Ratnasambhava であり、与願印を示し結跏趺坐で坐す。(18)は不空成就如来 Amoghasiddhi⁽¹⁰⁾であり、施無畏印を示し結跏趺坐で坐す。(19)はマカラである。

(20)は一面六臂の立像である。右手は剣と蓮華を持ち、安慰印⁽¹¹⁾を示す(以下(22)まで写真59⁽¹²⁾参照)。(21)は一面四臂像である。右の一臂は与願印を示し、残りの一臂は数珠を持つ。左の一臂は壺を持つ⁽¹³⁾。結跏趺坐で坐す。(22)は一面四臂像である。右の一臂は剣を持ち、残りの一臂は金剛杵を持つ。左の一臂は羂索を持ち、残りの一臂は手の甲を外にして胸におかれている。そして、結跏趺坐で坐す。この三尊のあるトーラナの外円に配された像は、(11)(12)(14)(17)(18)の五仏を除いた中央のトーラナの像と一致する。

(23)は現在は紛失している⁽¹⁴⁾(以下(25)まで写真60参照)。(24)は一面四臂像である。右の一臂は与願印を示し、残りの一臂は施無畏印を示す。左の一臂は仏塔を持ち、残りの一臂は蓮華を持ち、結跏趺坐で坐す。(25)は一面六臂像である。右の三臂はそれぞれ、三戟を持ち、与願印と施無畏印を示す。左の一臂は経函の乗った蓮華を持ち、残り二臂は水瓶を一つずつ持っている。この三尊があるトーラナの外円に配された像は、(11)(12)(14)(17)(18)の五仏を除いた中央のトーラナの像と一致する。

(26)は阿弥陀如来であり、定印を結び結跏趺坐で坐す。(27)は一面八臂の立像である。右手はそれぞれ、施無畏印、与願印を示し、羂索⁽¹⁵⁾、数珠を持つ。左手はそれぞれ、経函、法輪(?), 貝(?), 水瓶を持つ。(28)は大日如来であり、転法輪印を示し、結跏趺坐で坐す。(29)は不空成就如来であり、施無畏印を示し結跏趺坐で坐す。(30)は阿弥陀如来 Amitabha⁽¹⁶⁾であり、定印を結び、結跏趺坐で坐す。

(31)は、阿閼如来であり、触地印を示し、結跏趺坐で坐す。(32)は一面二臂の金剛薩埵(?)である。右手で金剛を持ち、左手に金剛鈴(?)を持つ。結跏趺坐で坐す。(33)は三面八臂像である。二臂は胸の前で交差する。右の四臂は剣、鉞、鉤、金剛を持つ⁽¹⁷⁾。左の四臂は経函、曲刀、三戟、鈴を持つ⁽¹⁸⁾。(34)は一面二臂像⁽¹⁹⁾で両手を交差する。結跏趺坐で坐す。

3. 本堂正面の左右の壁面と本尊

本堂正面の左右の壁面には、女性像と忿怒像などがある。右壁には図4の(35)から(44)までの像がある。(下記の番号は図4の番号が示すものと一致する。)

(35)は、一面四臂の像である。二臂は合掌し、残りの右手は数珠を、残りの左手は経函を持ち⁽²⁰⁾、結跏趺坐で坐す。(以下(39)まで写真61参照) (36)は一面二臂像である。右手は与願印を示し⁽²¹⁾、左手は鈴を持ち、遊戯坐で坐す。(37)は、一面二臂像である。右手は施無畏印を示し、剣の乗った蓮華を持つ。左手は与願印を示し、遊戯坐で坐す。(38)は一面二臂像である。

右手は金剛杵を持ち⁽²²⁾、左手で羂索を持ち、遊戯坐で坐す。(39)は一面二臂像である。右手で施無畏印を示し蓮華を持つ⁽²³⁾。左手は与願印を示し、遊戯坐で坐す。(40)は、一面二臂像である。右手は施無畏印を示し、左手は座の上に置く。遊戯坐で坐す⁽²⁴⁾。

(41)は一面二臂の坐像である。右手で、先に髑髏の付いた杖を持つ。左手は、人差指と小指を立て、残りの指で羂索を持つ。牛の上に遊戯坐で坐す(写真62)。(42)は一面二臂の飛天像である(写真62)。(41)の像の入った龕の上には、前足を上げ向き合った獅子の浮き彫りが、龕の左には、柱の浮き彫りがある。(左壁にもこれと同じ浮き彫りが左右対照の位置にある。)(43)はマカラ像の上に立つ一面二臂のガンガー像 Gaṅgā である。(写真63) (44)は、合掌する一面二臂の坐像である。(写真63) (45)は一面六臂の忿怒像である。三眼をもち、髑髏の付いた冠を付ける。右の三臂はそれぞれ、鉤、金剛、法輪を持つ。左の三臂はそれぞれ、鈴、旗⁽²⁵⁾、羂索を持つ。展左の脚勢をとる。髑髏の輪と虎皮を付け、鼓腹で火炎模様に縁どられた光背をもつ(写真64)。

左壁には(46)から(56)までの像がある。(46)は一面二臂像である。右手は膝の上に置き、左手は座の上に置き遊戯坐で坐す⁽²⁶⁾。(47)は一面二臂像である。右手で払子を持ち、左手で弓(?)⁽²⁷⁾を持つ。遊戯坐で坐す(写真65)。(以下(50)まで写真65参照) (48)は一面二臂像である。右手は施無畏印を示し、剣の乗った蓮華を持つ。左手は与願印を示し、遊戯坐で坐す(写真65)。(49)は一面二臂像である。両手で金剛杵を持ち、遊戯坐で坐す。(50)は一面二臂像である。右手は施無畏印を示し、剣の乗った(?)蓮華を持つ⁽²⁸⁾、遊戯坐で坐す。(51)一面四臂の像である。二臂は合掌する。右手は三戟を持ち⁽²⁹⁾、左手は羂索を持ち、結跏趺坐で坐す。

(52)は一面二臂の坐像である。三眼をもち、髑髏の付いた冠を付ける。右手を上へ上げ、左手を膝の上に置く。鼓腹で遊戯坐で坐す(写真66)。(53)はマカラの上に立つ一面二臂のガンガー像である(写真66)。(54)は一面二臂の像である。右手で金剛杵を持ち、左手で蓮華のつぼみ(?)を持つ。牛の上に遊戯坐で坐す(写真67)。(55)は一面二臂の飛天像である。(56)は三面六臂の忿怒像である。三眼をもち、髑髏の付いた冠を付ける。右手はそれぞれ、旗、斧⁽³⁰⁾、剣を持つ。左手はそれぞれ、法輪、棍棒、羂索を持つ。展右の脚勢をとり、髑髏の輪と虎皮を付ける。鼓腹で火炎模様に縁どられた光背を付ける(写真68)。

次に、ジャナ・バハの本尊は、本堂一階の正面入口奥の部屋に安置されている(写真69)⁽³¹⁾。本尊は、白色の一面二臂の観自在像で、右手は与願印を示している。高さは約1.2mであり、漆喰によって塗るかためられている⁽³²⁾。普段は、宝冠をつけ、衣で覆われて祠られている。

4. 百八観自在

本堂の南、西、北の一階壁面の上部には、百八の観自在の彩色画が並べられている(写真70-72)。これらは故アモーガヴァジュラ氏によってなされた図像学的研究をもとにして1966年にシッディムニ・サキャ氏が描いたものである⁽³³⁾。現在の「百八観自在」が掛けられる以前には、彩色を

施された木彫りの「百八観自在」が掛かっていたが、損傷が激しいため取り外されて、現在はジャナ・バハの本堂の中に保存されている⁽³⁴⁾。

5. 本堂側面の入口

回廊(写真74)に囲まれた本堂には、正面の他に南、西、北に入口がある。南の入り口には、かつてトーラナがあったが(写真73)⁽³⁵⁾、現在は本堂内に保存されている。

トーラナの中央の尊は、一面八臂の立像である。一对の二臂は転法輪印を、他の一对の二臂は定印を結んでいる。右の一臂は施無畏印を示し、残りの一臂は与願印を示す。また、左の一臂は経函を持ち、残りの一臂は羂索を持つ。中尊の右にある像は紛失している。中尊の左にある像は一面二臂の像であり、右手は与願印を示し、左手は蓮華を持ち⁽³⁶⁾、遊戯坐で坐す。

南の入り口の戸には、六つに仕切られた区画の中に、六つの忿怒像がある(写真75)⁽³⁷⁾。これらはいずれも、三面六臂であり、三眼をもち、髑髏の付いた冠を付ける。また、髑髏の輪と虎皮をつけ、鼓腹であり、火炎模様に縁どられた光背をつける。

向かって左側の区画のうち、最上段の区画の像は、右の三臂にそれぞれ、剣、羂索(?), 金剛杵を持つ。左の二臂にそれぞれ、金剛鈴、斧を持ち、残りの一臂は羂索を持ち、胸の上に置く。中段の区画の像は、右の三臂にそれぞれ、剣、鉤、金剛を持ち、左の一臂は、安慰印を示し、他の二臂はそれぞれ、金剛鈴を持ち、胸の上で法輪(?)を持つ。最下段の区画の像は、右の三臂にそれぞれ、剣、棍棒、金剛杵を持ち、左の三臂にそれぞれ、蓮華、金剛鈴、法輪を持つ。以上の左側の区画の像はいずれも展左の脚勢をしている。

向かって右側の区画のうち、最上段の区画の像は、右の三臂にそれぞれ、法輪、棍棒、二重金剛を持ち、左の三臂にそれぞれ、羂索、金剛鈴、鉤を持つ。中段の区画の像は、右の三臂にそれぞれ、法輪、鉤、剣を持ち、左の二臂にそれぞれ、羂索と蓮華を持ち、残りの一臂は施無畏印を示す。最下段の区画の像は、右の三臂にそれぞれ、棍棒、金剛杵、剣を持ち、左の三臂にそれぞれ、蓮華、法輪、金剛鈴を持つ。以上の右側の区画の像は、いずれも展右の脚勢をとる。

西と北側の入口の上には、トーラナがあるが、そこにはめられた像は現在では紛失している⁽³⁸⁾。

6. ほおずえ

本堂の二層の屋根は、世自在 Lokeśvara の彫像を付けた、ほおずえによって支えられている(写真76-83)⁽³⁹⁾。ほおずえには、それぞれ世自在の銘が記されている⁽⁴⁰⁾。ほおずえの位置とその銘を、図5にそって述べていこう⁽⁴¹⁾。(図5は、一階と二階のほおずえの位置を表したものである。)

- (1) 蓮華主世自在 (Padmanātha-lokeśvara)
- (2) 知慧界世自在 (Jñānadhātu-lokeśvara) (写真76)
- (3) 舞蹈主世自在 (Nṛtyanātha-lokeśvara)

- (4) 合掌世自在 (Kṛtāñjali-lokeśvara)
- (5) 螺貝世自在 (Śaṅkanātha-lokeśvara)
- (6) [銘はない。]
- (7) 仏頂世自在 (Uṣṇiṣa-lokeśvara)
- (8) 吉祥世自在 (Śrī-lokeśvara)
- (9) 知慧吉祥世自在 (Jñānaśrī-lokeśvara)
- (10) 釈迦仏陀世自在 (Śakyabuddha-lokeśvara) (写真77)
- (11) 金剛主世自在 (Vajranātha-lokeśvara) (写真78)
- (12) 世間主世自在 (Viśvanātha-lokeśvara)
- (13) 法界世自在 (Dharamadhātu-lokeśvara)
- (14) 獅子主世自在 (Siṃhanātha-lokeśvara)
- (15) 大金剛薩埵世自在 (Mahāvajrasattva-lokeśvara) (写真79)
- (16) 法輪世自在 (Dharamacakra-lokeśvara)
- (17) ハリハラ (訶梨訶羅) 世自在 (Harihara-lokeśvara)
- (18) 阿弥陀世自在 (Amitābha-lokeśvara)
- (19) 最上宝世自在 (Ratnottama-lokeśvara)
- (20) 明主世自在 (Vidyāpati-lokeśvara)
- (21) 蓮華師世自在 (Kamalabhāṭṭa-lokeśvara)
- (22) 無心世自在 (Acitta-lokeśvara)
- (23) 夜摩棒世自在 (Yamaḍaṇḍa-lokeśvara)
- (24) 黒色世自在 (Kṛṣṇavarṇa-lokeśvara)
- (25) 大金剛主世自在 (Mahāvajranātha-lokeśvara)
- (26) 大蓮華主世自在 (Mahāpadmapāṇi-lokeśvara)
- (27) 大金剛鉤世自在 (Mahāvajradhṛk-lokeśvara) (写真81)
- (28) 大金剛界世自在 (Mahāvajradhātu-lokeśvara)
- (29) 大宝族世自在 (Mahāratnakula-lokeśvara)
- (30) 千日世自在 (Sahasrasūrya-lokeśvara)
- (31) 螺貝世自在 (Śaṅkanātha-lokeśvara)
- (32) 宝称世自在 (Ratnakīrti-lokeśvara)
- (33) アシニラ世自在 (Asinila-lokeśvara⁽⁴²⁾) (写真82)
- (34) 文殊達多世自在 (Mañjudatta-lokeśvara)
- (35) 月輪(?)世自在 (Candrabimba(?)-lokeśvara⁽⁴³⁾)
- (36) 大日輪(?)世自在 (Mahāsūryabimba(?)-lokeśvara⁽⁴⁴⁾) (写真83)
- (37) 無畏達多世自在 (Abhayadatta-lokeśvara)
- (38) 施無畏世自在 (Abhayaṅkari-lokeśvara)

(39) 文殊生世自在 (Mañjubhūta-lokeśvara)

(40) 世間生世自在 (Viśvabhūpa-lokeśvara)

なお、これらのほおずえの他に、一階と二階の四隅には前足を上げた獅子の彫像を付けたほおずえがある。

註

- (1) ネーバルでは世自在を觀自在 Avalokiteśvara とも言い、「世自在」と「觀自在」は同義で用いられる。
- (2) 写真56は [立川 1987: 31] にあるものを使用した。このトーラナ全体の写真は [Locke 1980: pl. 26] にもある。
- (3) [Locke 1980: 130]
- (4) Locke は金剛手 Vajrapāni としている [Locke 1980: 127]。
- (5) Locke は蓮華手世自在 Padmapāni-lokeśvara としている [Locke 1980: 129]。
- (6) Locke は蓮華手世自在 Padmapāni-lokeśvara としている [Locke 1980: 129]。
- (7) [Locke 1980: 128]
- (8) このトーラナの写真は [立川 1987: 66-67] にもある。
- (9) Locke は宝生如来 Ratnasambhava としている [Locke 1980: 129]。
- (10) Locke は阿閼如来 Akṣobhya としている [Locke 1980: 129]。
- (11) 一般に、右手を上げ、手のひらを外に向け、曲げた人差指あるいは中指の先を親指に付けて輪をつくり、その他の指は、伸ばす印契である [Saunders 1960: 67]。
- (12) このトーラナの写真は [Locke 1980: pl. 28] にもある。
- (13) 他の一臂は不明である。
- (14) Locke によれば、紛失する以前には、一面八臂の像があった。右の四臂で施無畏印、与願印を示し、絹索、数珠を持ち、左の四臂で水瓶、蓮華、三戟、経函を持っている [Locke 1980: 129]。
- (15) Locke は法輪としている [Locke 1980: 130]。
- (16) Locke は宝生如来としている。
- (17) [Locke 1980: 130]
- (18) [Locke 1960: 130]
- (19) Locke は大日如来 Vairocana としている [Locke 1980: 130]。
- (20) Locke はでんでん太鼓 damaru としている [Locke 1980: 131]。
- (21) Locke は施無畏印としている [Locke 1980: 131]。
- (22) Locke は本としている [Locke 1980: 131]。
- (23) [Locke 1980: 131]
- (24) [Locke 1980: 131]
- (25) [Locke 1980: 131]
- (26) [Locke 1980: 131]
- (27) Locke は蓮華としている [Locke 1930: 131]。
- (28) Locke は炎が立ち昇る蓮華としている [Locke 1980: 131]。
- (29) Locke は蓮華のようであるとしている [Locke 1980: 132]。
- (30) [Locke 1980: 132]
- (31) この本尊の写真は [Locke 1980: pl. 25] [Bernier 1979: pl. 87] にもある。
- (32) [Locke 1980: 144]
- (33) [高岡 1982: 1]

- (34) [Locke 1980: 133 fn. 14]
- (35) この写真は、名古屋大学助教授立川武蔵氏が1982年に撮影したものである。
- (36) Locke は安慰印(vitarkamudrā)を示すとしている [Locke 1980: 132]。
- (37) この写真は [立川 1987: 129] より借用した。
- (38) Locke によると、西の戸口のうえのトーラナには六臂の観自在立像があったとされる [Locke 1980: 133]。
- (39) 写真76-79は、1982年に写真家横田憲治氏が撮影したものである。
- (40) [Locke 1980: 135-137]
- (41) カッコ内は銘をサンスクリット表記に直したものである。
- (42) サンスクリット銘は不明である。
- (43) 銘は明確には読めない。ただし、Locke は Candrabima-lokeśvara としている [Locke 1980: 137]。
- (44) 銘は明確には読めない。ただし、Locke は Mahāsūryabima-lokeśvara としている [Locke 1980: 137]。

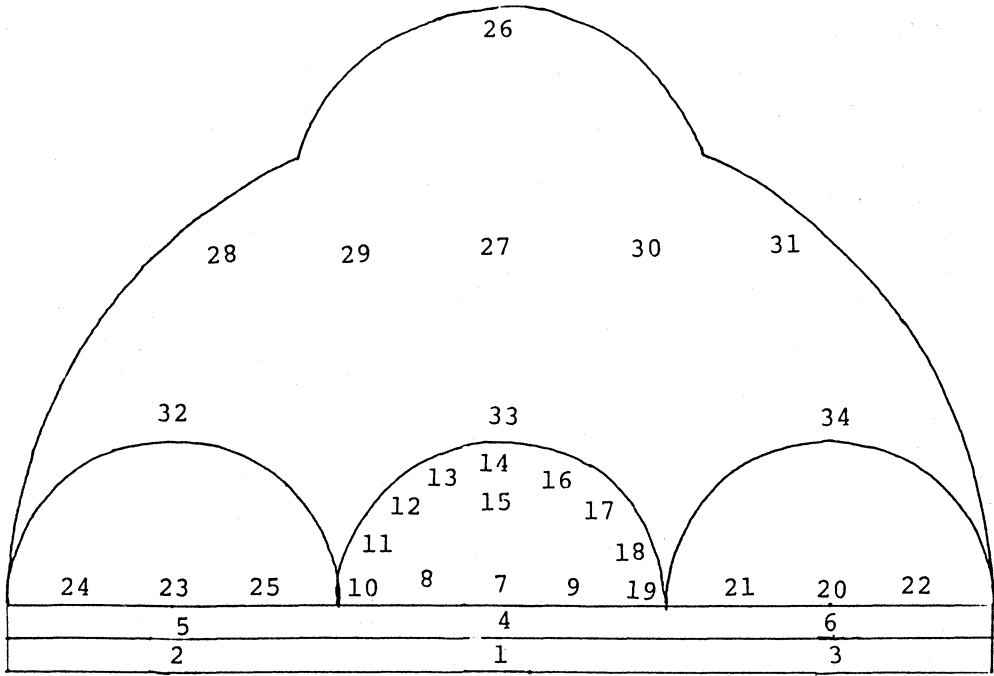


图 3

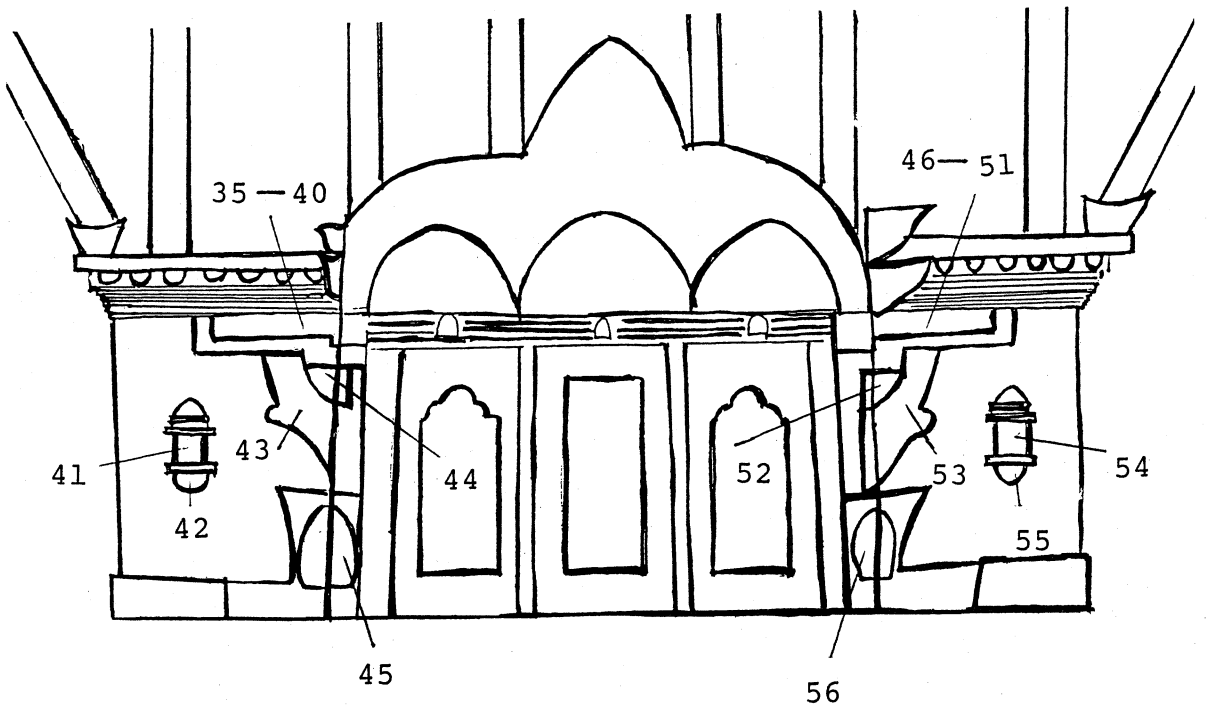


图 4

